

逸脱する或本歌

—— 卷二・柿本人麻呂挽歌の「編纂」と「注釈」 ——

居駒 永幸

はじめに

万葉集の歌は、万葉集に書かれる時点においてすら流動していた。安定した歌でないことが万葉歌のあるべき姿だったとも言える。口誦の声の歌というだけでなく、記載の次元でもその現象は見られる。それは万葉集の編纂者が本文に対する別本の異伝として記した歌、すなわち或本歌の存在に顕著に現れている。かつて丸山隆司氏は、異伝をテキストの不安としてとらえたように、⁽¹⁾異伝を伴う表現こそ万葉集のテキストのあるべき姿だったのだ。

さしあたって卷二挽歌で見れば、或本歌は柿本人麻呂作歌に集中する傾向があり、そこに人麻呂挽歌がもつ内部的問題を暗示すると同時に、卷二挽歌の「編纂」と「注釈」の作業に顕在化する現象であったことを示している。ここに「注釈」というのは、作歌事情や或本などの異伝がしばしば左注で示されるからであって、左注は編纂者の「注釈」行為と見なし得る。この「編纂」と「注釈」は、万葉集に歌を書くことであり、流動する歌を万葉歌として確定することにあつた。

それでは、万葉集の本文歌として確定された歌とともに、なぜ異伝としての或本歌が記載されるのか。本稿の課題は、卷二挽歌の柿本人麻呂作歌において、或本歌が存在する意味を問うことを通して、人麻呂挽歌というテキストの成立を考えることにある。

なお、或本歌に関わって伝誦説と推敲説が旧来対立しているが、本稿では或本歌が万葉集に在ることを問うのであって、その前歴を洗い出すことが目的ではないことを最初にことわっておきたい。

一、或本歌の領域と逸脱

或本歌が万葉集に最初に出ているのは、卷一雑歌の天武天皇御製歌の箇所である。

或る本の歌

み吉野の 耳我の山（嶺）に 時じく（なく）そ 雪は降るといふ（降りける） 間なくそ 雨は降るといふ（零りける） その雪の 時じき（なき）が如 その雨の 間なきが如 隈もおちず 思ひつつぞ来し その山道を

右句々相換れり。因りてここに重ねて載す。

(1・二六)

括弧内が本文歌二五の詞句である。従つて、本文歌は或本歌の小異歌と見られるが、その間に「句々相換」があるとし、或本に記された歌を万葉集に「重載」すると左注では説明する。ここに明らかなように、或本歌は詞句において「句々相換」と認識される異伝の歌で、それは本文歌とは別に書かれて存在していたことを示す。問題は、本文歌二五が記された後に、なぜ

異伝の或本歌二六を載せなければならなかったのかということだ。その根拠が「句々相換」にあつたわけで、本文歌は「句々相換」の或本歌とともに存在するという歌のあり方を示している。

もつともこの詞句の相違は、歌の位相の違いを表すとも見られている。西郷信綱氏によれば、本文歌は、天武天皇が歌謡である或本歌を土台とし、壬申の乱で体験した吉野の地を回想して詠作した「詩的再創造」の歌という。「といふ」と「ける」が歌謡と個人詠の位相の違いを表すというのだ。それは認められるにしても、或本歌は天武御製歌の原歌として掲げられているのではなからう。吉野隠栖の境遇をうたう天武御製歌は、人々の間に伝誦され流布する或本歌を伴うことによつて、その類同性のもとに受け入れられ理解されたと考えられる。このように或本歌は、歌詞の異伝を示すという領域を超えて、本文歌との間に表現上の関連性を生じさせる契機を孕むのだ。

次に、或本歌の第二の例を見てみよう。

大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇の紀伊国に幸しし時の

歌

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思はな巨勢の春野を

(1・五四)

右の一首は坂門人足

或る本の歌

河の辺のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野
は
(1・五六)

右の一首は春日藏首老

これは持統太上天皇の紀伊行幸の時の歌で、行幸の道すがら旅の宴で披露されたものと見られる。この或本歌は詞句の異伝とともに作者の異伝をも示している。作者の異伝も或本歌の領域であつた。五六に基づいて五四がうたわれたとする通説に従えば、通過する土地を讚める「見れども飽かず」の常套句をもつ儀札歌五六を踏まえて、巨勢の椿の景物を楽しむ宴席歌五四へと転用したということにならう。或本歌には、五四に対して異なる作者の異伝歌を示すだけでなく、五四の基盤にある、人々に流布する旅の歌の世界を共有する意味があつたはずだ。歌詞や作者の異伝を示すという或本歌の領域は、ここでも超えられる契機を孕んでいる。また、春日藏首老の歌が宴席において坂門人足の歌に答えたものとする見方に立てば、そしてその解釈は十分に可能性があるのだが、五四に対して或本歌五六の新たな関係が浮かび上がってくる。もはや或本歌は自らの領域を逸脱して本文歌と同じ位置を主張すると言つてよい。

卷一の最後の例にも簡単に触れておこう。それは和銅三年の奈良遷都の時の歌(1・七八)に対して、「或る本、藤原京よ

り寧楽宮に遷れる時の歌」とある作者不明の長歌と反歌の二首（一・七九、八〇）である。この場合は前二例のような、本文歌に対する異伝歌の關係ではない。「飛鳥の明日香の里を置きて去なば」とうたう七八は、おそらく明日香古京から藤原宮への遷都時の古歌を奈良遷都の儀礼歌として転用したもので、その上句が奈良遷都の歌に合致しないと判断し、奈良遷都にふさわしい歌を或本から二首補入したと見てよからう。奈良遷都の歌としては、本文歌よりも或本歌の方が、とりわけ長歌七九の道行表現においてむしろ適合している。

卷一の三ヶ所の或本歌を見てきたが、或本歌は歌詞や作者の異伝を示すという領域を示しつつ、その領域を逸脱して本文歌との間に新たな関係性を創造する契機をも見せていた。さらには本文歌を補完する或本歌さえ存在し、或本歌は単なる補助資料を超えて本文歌に連続する自立した歌を志向するものであった。

二、或本歌の記載の根拠

或本歌は卷二になると急増し、石見相聞歌の或本の長歌（一三八）と反歌（一三九）にも、それに関連する左注が付いている。

反歌一首

石見の海打歌の山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむか

（2・一三九）

右、歌躰同じといへども句々相替り。因りてここに重ねて載す。

これは前掲二六の左注と同趣であり、或本歌を記す理由を卷二で重ねて述べたものである。一三一―一三三の本文歌とは歌詞の全体が同じでも、「句々相替」により一三八・一三九の或本歌を「重載」したと、その根拠を示したのだ。しかし、一三一―一三三が本文として確定されているのに、「句々相替」とは言え、なぜその異伝としての或本歌が記されるのか。推敲された本文歌に対して或本歌は人麻呂の初案とするにしても、完成度の低い初案を記載することの理由がはつきりしない。その点の説明が必要なのである。

そこで考えられることは、本文と或本は推敲案と初案を示すものとして書かれているのではなく、両者が併記されることが万葉歌のあり方なのだという認識であろう。すなわち本文歌は、或本歌という「句々相替」の異伝を伴うことで、類歌の共同性を基本とする万葉歌の存在態を示すことになった。その意味では、或本歌は本文歌と補完しあう関係のもとに、十分なる根拠をもって記載されたのだ。

石見相聞歌の場合は、長歌に「句々相替」が見られるが、その根拠の一つとして注目すべきは、やはり「石見」ではじまる反歌の「句々相替」である。この「石見」反歌は、本文の第一反歌（一三二）、或本の反歌（一三四）、そして前掲の或本反歌（一三九）の三首も出てくるのだ。一三二と一三九の現在推量「らむ」、一三四の過去推量「けむ」という相違も重要だが、特に注目されるのは、一三二と一三四の「高角山」が一三九では「打歌山」となっている点である。『万葉考』以来、音仮名「打歌」の下に「角か津乃」の字の脱落があると見られているが、

脱字説に拠る前に「打歌山」と書かれている意味を問わなければならぬだろう。この山は、伊藤博氏が述べたように、石見の妻と別れる見納めの山であり、別れの歌を詠む場所でもある。「打歌山」は、そのような妻との別れの歌を詠む山のイメージを呼び起こすであろう。前二首の「高角山」にはそれが無い。そこで妻を見納める「高角山」とともに、妻との悲別の歌を詠む「打歌山」が求められたのではないか。「打歌山」の或本歌が記載される根拠の一つは、そこにあったと見てよい。従って、或本歌は本文歌の異伝資料としてだけでなく、歌内部の關係性をも伴って併記されていると言えるだろう。

本文歌と或本歌による構成という点で、それと同様の關係にあるが人麻呂の泣血哀慟歌である。ここでは本文歌の二一〇の長歌と二一一・二一二の反歌に対して、或本歌の長歌二二三と反歌二二四―二二六が対応している。やはりこの場合も、或本歌の初案から本文歌へと推敲されたと見られている。しかし、石見相聞歌と同様、本文歌が確定されているのになぜ初案の歌が記されるのか。それを説得する説明は見出しがたい。或本歌が併記されることについては、本文歌に対する異伝や初案という従属した關係からは説明し得ないのだ。或本歌が存在する根拠は、本文歌にはない歌の表現にあると見なければならぬ。

そのような視点で或本歌を見ると、長歌では、本文歌二一〇の「思ひし妹が玉かざるほのかにだにも見えぬ思へば」と或本歌二二三の「思ひし妹が灰にたていませば」の相違、反歌では、或本歌の方だけ次の一首が加わっていることが特に注目される。

家に来てわが屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕

(2・二一六)

この二点の大きな相違が或本歌の記載の根拠になっていると見られる。まず最初の長歌の問題から言えば、その大きな違いは妻を亡くした男が妻の隠れた山に会いに行く場面の表現である。本文歌では、妻の姿がほんやりとさえも見えないことを思うと、と妻に会えなかつた嘆きでうたい収めるのに対して、或本歌では、妻が灰になっておいでなので、と厳しい死の現実を示して結ぶ。歌の表現としては、二一〇で妻の不在を確かめ、二二三で妻との決定的な隔絶にうたい及ぶという關係であつて、或本歌の結句において妻の動かしがたい死が確かめられ、本文歌の末尾と呼応しつつ全体が結ばれる。或本歌の二二三とは、二一〇の異伝や初案という領域から逸脱し、本文歌と自立した關係において亡妻挽歌の世界を構築していると言えよう。

次に或本歌にしかない反歌では、「外に向きけり妹が木枕」と、寢屋にある妻の枕が外に向いていることを嘆く。木枕は妻の魂の拠り所であるから、外に向くとは妻屋から妻の魂が去ってしまったことになる。これはおそらく古代の決定的な死の表現なのだろう。妻屋には妻の魂さえ不在なのであつて、それは長歌の「灰にたていませば」と対応している。妻は灰となり、枕は外に向くと或本歌でうたうのは、妻の魂の不在と他界への鎮まりという泣血哀慟歌のテーマに沿うものであり、或本の反歌二一六は歌群全体を結ぶ役割をも果たしていることになる。

泣血哀慟歌は、本文の長歌二一〇、反歌二一一・二一二に続いて、或本の長歌二二三、反歌二二四―二二六が対応して併記

されていた。卷二挽歌のテキストとしては、泣血哀慟歌はその順序で読むように構成されているのだ。そして右に見てきたように、泣血哀慟歌には石見相聞歌と同様、或本歌と本文歌との間に単なる異伝の領域を超えて構成上の呼応関係があり、それが編纂者の意図によるものであることは明らかである。

三、流動する反歌と或本歌

泣血哀慟歌の或本の反歌三首のうち二一六は、すでに見たように本文歌にはない。反歌二首形式が確立することによって、二一六は本文長歌二一〇の結末部との関係で反歌から除外されたと考えられる。この二一六には、長歌に付いたり離れたりする流動する反歌のあり方が示唆されていると言えよう。このような反歌の流動性は人麻呂作歌によく見られるのだが、特に卷二挽歌では、それが或本歌と関わって発生することに注目しなければならぬ。

最初に、日並皇子挽歌の反歌の例をあげてみよう。

反歌二首

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜
しも

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜
しも或る本に件の歌をもちて後皇子
しも 尊の殯宮の時の歌の反と爲せり

第二反歌の一六九には、或本では人麻呂作の高市皇子殯宮挽歌の反歌とする、との注記がある。「件の歌」は関係するひとまとまりの歌を言い、この場合反歌二首を指すように見えるが、金沢本などの古本では明らかに一六九の下に小字で記され

るので、或本の注の範囲は一六八に及ばないと考えてよい。左注ではなく、一六九の一首に限定した下注であることは、この場合重要だと思われる。渡瀬昌忠氏は、或本では「一云」の異伝の長歌と一六八の反歌一首だけの形を推定し、この段階では一六九は高市挽歌の反歌であったとする。ただ、一六九は異伝の第一稿にも本文の第二稿にも、また或本の高市挽歌にもあったが、このように校異したという別案をも示している。いずれの可能性もあり得よう。高市挽歌と日並挽歌のどちらの反歌でもあるという一六九のようなあり方は、このように或本歌の存在によって知られる。編纂者が示す或本の注記もテキストの一部であり、本文歌はもちろん、注記が示している或本の反歌の流動性も含めた総体が万葉歌の表現なのである。卷二挽歌の重層するテキストと言えよう。

この注記が一六九に付された理由は、高市挽歌が反歌の異伝を伴っていることに関係してはいるのではないか。

短歌二首

ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月も知らに恋ひ渡るか
も

壇安の池の堤の隠沼の行方を知らに舍人はまよふ

或る書の反歌一首

泣沢の神社に神酒すゑ禱祈れどもわご大君は高日知らしぬ

右の一首は類聚歌林に曰はく「檜隈女王の、泣沢神社を怨むる歌」といへり。日本紀を案ふるに云はく「十年丙

申の秋七月辛丑の朔の庚戌、後皇子尊薨りましぬ」といへり。

或書の反歌は別本に書かれていた高市挽歌の反歌であることを示す。或書は卷二にこの一例しかなく、万葉集全体でも六例見られるのみで、或本の一つとして扱つてよからう。或書に書かれたのは一云の本文をもつ長歌であらう。二〇二は反歌と明記されているので、或書には一云の高市挽歌とともに書かれていたはずだ。そして日並挽歌の反歌一六九は、二〇二とともにこの或書に記されていたと見るのが自然ではないか。一六九は、太陽は変わらぬに照っているが、隠れる月のように高市皇子はこの世を去つたとうたい、二〇二は、皇子がこの世で復活するのを祈っていたが、あの太陽のように天界を統治するようになってしまった、と呼応する反歌としてあつたと考えられる。しかし、本文では、一六九と二〇二に替えて二〇〇と二〇一を反歌として採用し確定した。或書に二〇〇と二〇一が書かれていたかどうかは不明であるが、或書は一つの反歌が複数の皇子の挽歌に結びつくことを明らかにしている。或本と本文との間において、流動する反歌が発生するので。

しかも、左注によれば、或書の反歌二〇二は人麻呂作ではなく、檢限女王の歌として類聚歌林に記されていたという。檢限女王は高市皇子の娘とする土屋文明『万葉集私注』に従うべきで、二〇二は死者に対する近親者の歌という挽歌の伝統に連なるものであつた。「泣沢神社を怨むる歌」とは、泣沢神社にこの世への復活を祈つたが、ついにその祈りが叶わなかつたことを怨んだ歌というのである。菅野雅雄氏が説くように、その祈

りは死者の復活を願う死後のものと見るべきであらう。しかし、この歌の主題は復活ではなく、「わが大君は高日知らしぬ」にある。すなわち父高市が太陽のように天界を治め、神となつて高天原に鎮まることを意味する。歌の呪力によつて死者の魂を他界に鎮めるのが挽歌であり、近親者の言葉にこそ呪力があるとされた。それが近親者の挽歌の伝統である。檢限女王の歌はそのように理解される。

それでは本文反歌二首が確定しているのに、なぜ或書の反歌が記載されたのか。本文歌と或書の反歌との関係から見る必要があらう。長歌では、人麻呂は高市皇子の殯宮での鎮まりを主題としていた。その長歌を受けて、第一反歌二〇〇で「天知らしぬる君」とうたう。或書の反歌二〇二は、それに呼応して「わが大君は高日知らしぬ」と、より莊重に高市皇子の天界への鎮まりをうたい、高市皇子の喪礼の完結を印象づける歌であつた。このように二〇二は単なる異伝の存在ではなく、卷二挽歌の編纂において、本文歌に続いて或書の反歌が読まれるように構成されたということである。

或書では、一云を本文とする長歌の、人麻呂作の反歌として二〇二が位置づけられていたと考えられる。それが檢限女王の歌と分かるのは、類聚歌林を引く左注によつてである。或書の反歌に作者の混乱があつたことになる。高市挽歌は、近親者の哀傷挽歌や人麻呂の献呈挽歌など、数度にわたつて唱詠されたであらう。万葉歌の作者と歌い手は唱詠の場においてしばしば未分化であり、作者が紛れることも十分あり得る。左注は或書の反歌を近親者の挽歌とする編纂の際の注釈行為であつて、その

注釈は人麻呂作の本文歌に対して一云の長歌と松隈女王の反歌という、高市挽歌の複線的なテキストを作り出しているのである。

四、連作挽歌の形成と或本歌

或本（書）において、流動する反歌の存在を見てきたが、ここにもう一つ重要な例がある。日並挽歌の或本歌である。

或る本の歌一首

島の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず

(2・一七〇)

皇子尊の宮の舍人らの働しび傷みて作れる歌二十三首

高光るわが日の皇子の万代に国知らさまし島の宮はも

(2・一七一)

島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君いませざとも

(2・一七二)

(以下省略)

或本歌は前に引いた日並挽歌の本文反歌に続いて記されるが、この場合も本文歌に対する詞句異伝を示すものではない。それではなぜ、日並挽歌の或本歌は本文反歌の後に併記されるのか。この或本歌は、高市挽歌の或書の反歌二〇二と同じように本文反歌二首に続くので、一見反歌のように見える。事実、類聚古集には反歌とする注記がある。しかし、諸本に或本反歌と書く例はない。従って、二〇二の場合のように、一云を本文とする長歌と反歌の関係をそこに見ることはできない。或本歌一七〇は、人麻呂作の日並挽歌として伝えられた独立の短歌で

あって、本文の長反歌と舍人歌群の間に、反歌と紛れるような形で位置づけられたことになる。

或本歌が書かれた理由は、長反歌と舍人歌群の間に位置することと深く関わっているにちがいない。まず日並挽歌の長歌一六七では、亡くなった草壁皇子が真弓の岡の殯宮に鎮まり、主を失った宮人たちの戸惑いをうたう。ところが、ここには生前の島の宮の描写がなく、殯宮と生前の宮との対比をうたう人麻呂の他の殯宮挽歌と異なっている。日並挽歌の長歌は殯宮への鎮まりを主題としているのだ。

それに対して第一反歌一六八では「皇子の御門」への哀惜をうたい、殯宮から生前の島の宮へと主題が移ったように見える。しかし、そこに「島の宮」の語がなく、「天見ることく仰ぎ見し」は具体的な描写から遠い。第二反歌も、前述したように、隠れる月に皇子の死を重ねた象徴的表現で、島の宮とは無関係である。本文反歌二首には島の宮への一貫した意識がなく、そのイメージも希薄と言わざるを得ない。

ところが、舍人歌群は最初から「島の宮」の語が提示され、その池で皇子に飼われていた遺愛の「放ち鳥」が生前の皇子と島の宮の情景を浮かび上げさせる。最初の二首を見るだけでも、島の宮と皇子の不在が舍人歌群の主題になっていることは明らかである。殯宮挽歌も舍人歌群も一連の日並挽歌であった。しかし、島の宮への意識が薄い長反歌とそれを主題とする舍人歌群の間は、必ずしも連続しているとは見られない。そこで、二つの歌群をつなぐべく人麻呂の島の宮の歌が或本から配置されたと考えられる。この或本歌一七〇は本文長反歌から見

れば、第一反歌と呼応して「島の宮」を明示し、あたかも反歌のように位置する。一方、舎人歌群から見れば、「島の宮」「放ち鳥」を受けて展開する起点として機能する。従ってこの或本歌には、二つの歌群を同時同所であつたわかれた連作的な日並挽歌として構成する編纂意図があるのだろう。ここには連作挽歌という歌群構成を作り出す或本歌の存在が見えてくる。

このような連作挽歌という視点から、最後に人麻呂終焉歌群に触れておきたい。

柿本朝臣人麻呂の石見国に在りて臨死らむとせし時に、自ら傷みて作れる歌一首

鴨山の岩根し枕けるわれをかも知らにと妹が待ちつつあるらむ
(2・二二三)

二首 柿本朝臣人麻呂の死りし時に、妻の依羅娘子の作れる歌

今日今日とわが待つ君は石川の貝に(一は云はく、谷に)交りてありといはずやも
(2・二二四)

直の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ
(2・二二五)

丹比真人(名をか)の柿本朝臣人麻呂の意に擬へて報へたる歌一首

荒波に寄りくる玉を枕に置きわれここにありと誰か告げなむ
(2・二二六)

或る本の歌に曰く
天離る鄙の荒野に君を置きて思ひつつあれば生けるともなし

(2・二二七)

右の一首の歌は作者いまだ詳らかならず。但し、古本、この歌をもちてこの次に載せたり。

二二三の自傷歌にはじまる六首の歌群が、人麻呂の終焉を伝える一連の歌であることは自明のことである。これらは人麻呂の死後、後人によつて仮託された伝誦歌と言われてきた。これとは別の視点から、人麻呂が自ら虚構の死を演じた創作歌とする見方もあるが、自作の虚構歌が人麻呂の歌世界に適合するか疑問であり、これらの歌群を生み出したのは、やはり人麻呂死後の伝承世界であつたと考えられる。

このような人麻呂終焉歌群の表現を見ると、一連の歌とは思えないほどつながりに欠ける。人麻呂臨死の場面が、自傷歌では鴨山、妻の歌では石川、一云の異伝では谷になり、さらに丹比歌では海辺というように、まったくばらばらにうたわれている。もちろん人麻呂歌の伝承世界を基盤とすることを考えれば、いくつかの異なった伝承歌が生み出されるのは容易に想定できる。しかし、これが一連の歌として本文歌に構成された時、人麻呂の様々な臨死の場面をうたった歌という印象を与えることになった。人麻呂の死というテーマで、自らの臨死の歌、臨死の夫を思い遣る妻の歌、臨死の人麻呂に擬した後人の歌と連作的に構成されたゆえ、その死は別々の場面になったと解することはできる。

だが、冒頭の自傷歌の山中臨死から次第にかけ離れ、最後の海辺の場面に至っては、連作挽歌の構成を破綻させる結果にもなりかねない。そこで、冒頭の山中臨死に呼応する「天離る鄙の荒野」の歌二二七が全体の結びに位置づけられたのではない

か。伊藤博氏が「荒野」の語義からすれば、「鴨山」は都人から見て「天離る鄙の荒野」になりうるわけで、この歌には海辺の映像に終始する丹比真人の二二六の歌に対する批判があるように思う⁽¹⁾と述べるのは、この辺の或本歌記載の事情を言い当てているであろう。それが編纂の時に古本から載せた或本歌である。その類歌が泣血哀慟歌の反歌にあることから、それが人麻呂作の独立した挽歌として伝えられ、或本の人麻呂終焉歌群の一首になっていたと見られる。或本歌二二七も本文歌と異伝関係にない歌で、或本歌の領域を逸脱し、人麻呂終焉歌群の形成にまで関わっていると見えよう。この或本歌によって、冒頭の山中に呼応して荒野の死で完結する連作挽歌のテキストが成立してくるのである。

結び

これまで見てきたように、巻二挽歌は安定した歌のテキストではない。編纂時にいくつもの異伝を抱え込まざるを得なかった状況に、それは露呈している。その確定し得ない部分が或本歌であった。或本歌は異伝の記載という自らの領域をしばしば逸脱する。本稿では、巻二挽歌の或本歌にその逸脱の諸相を見てきたわけである。特に人麻呂挽歌においては、本文歌と或本歌が併記される複線的で重層するテキストが、逸脱する或本歌によって作り出されている。歌群の構成に或本歌が組み込まれ、連作挽歌の形成にも関わっていくのは、巻二の編纂によるものである。その意味では、或本歌の存在は巻二固有のテキストのあり方と言えるのであるが、それと同時に巻三、巻十三な

どの編纂にも或本歌が関わって作り出されるテキストが見えてくる。それらは今後の課題である。

注(1) 「異伝」—「文獻」の不安あるいは不安の「文獻」

(藤女子大学国文学雑誌)一九八六年九月

(2) 『万葉私記』(一九七〇年 未来社)

(3) 野田浩子『万葉集の叙景と自然』(一九九五年 新典社)は、遷都の歌との見方を踏まえた上で、家刀自の祝福をうたったものとする。

(4) 『萬葉集の歌人と作品・上』(一九七五年 塙書房)

(5) 伊藤博『萬葉集の表現と方法・下』(一九七六年 塙書房)

(6) 『柿本人麻呂研究・島の宮の文学』(一九七六年 桜楓社)

(7) 中西進『万葉集(一)』(一九七八年 講談社文庫)

(8) 「泣沢の神社に祈る——二〇二番歌の解釈——」『万葉学論攷』(一九九〇年四月)

(9) 或本歌一七〇については、舎人歌群二十三首の出発点で、第一の四首グループの最初の歌とする渡瀬昌忠氏の説(注6同書)がある。二十四首グループとするのである。しかし、一七〇の出発点説には小野寛氏の疑問が提示され「草壁皇子舎人らの勸傷歌」『万葉集を学ぶ・第二集』(一九七七年二月)、また平館英子「島の宮舎人等挽歌の構成」『萬葉歌の主題と意匠』(一九九八年 塙書房)は、一七〇を除いた二十三首を5グループに分ける。ここには歌の唱詠の場に直接結びつけることの難しさがあろう。

(10) 伊藤博氏、注(5)同書

(11) 『萬葉集釋注』(一九九五年 集英社)

(いこま なぐゆき)